回覧														

アクティブ長洲小

長洲町立長洲小学校だより
令和2年11月27日第13号
文責　校長　川冨　一弘

人権は身近なところから…

◊人は 人を浴びて 人になる◊

（これは、とある小学校の6年生の作文です。）
Aさんの家は毎日ケンカばかりです。Bさんの家は、平和で家族みんなが仲良しです。Aさんは不思議に思って、Bさんに聞きました。
「どうしてあなたの家は、そんなに仲がいいの。ウチは、毎日ケンカばかりだよ。」
するとBさんは答えました。
「Aさんの家は、善人が多いんだと思うよ。うちの家はみんなが悪者なんだ。」
といって次のような話をBさんがしてくれました。

※皇帝ダリア‥冬の日照時間が短くなると花が咲くそうです。冬本番も間近ですね。

《学校近くに咲く皇帝ダリア》

今日、私が学校から帰ると、お母さんが兄に、
「お兄ちゃんの机を拭いていて金魚鉢を落として割ってしまった。もっと気をつければよかったのにお母さんが悪かったわ。」と言いました。
するとお兄ちゃんは、
「僕が端っこに置いておいたから、僕が悪かったんだよ。」って、言いました。
でも私は思い出しました。
「きのうお兄ちゃんが端っこに置いたとき、私は「危ないな。」と思っていたのに、それを言わなかったから、私が悪かったのよ。」と言いました。
夜、帰ってきてそれを聞いたお父さんは、
「いや、お父さんが金魚鉢を買うとき、丸い方じゃなくて四角い方にすればよかったなぁ。いやー、お父さんが悪かったな。」と言いました。・・・そしてみんなが笑いました。
うちはいつもこうなんです。うちの家はみんなが悪者なのです。

ここで、初めて、「Aさんの家は善人が多いだと思うよ。」の意味がわかると思います。
Aさんの家は、みんな、「自分は正しい＝自分は善人」だと思っています。だから、「自分は間違っていない、自分が正しい。」と思ってしまうのです。きっと、Aさんの家の茶碗がもし割れたら、Aさんの奥さんは　「誰がこんなところに茶碗を置いておいたの！？まったくもー。」と言っていたことでしょう。
一方でBさんの家は、何か問題が起こると相手の気持ちを真っ先に考えて、「自分に何かいけない部分はなかったかな」と、各自が自分を振り返り、責任を引き受け合っているのです。なんか、素敵な家族だなーと思いませんか。お互いに相手の事情を想像して、いたわり合う。しかも、それぞれが卑屈になっているわけではなく、お互いにあたたかな気持ちになっている。これが正に家庭における人権感覚なんだと思います。

コロナ禍で家族で一緒に過ごす時間も増えていることと思います。人権教育は親子の会話が原点です。その家庭で育まれた人権感覚を社会化していくのが学校や地域の役割と言えます。人は人を浴びて人になるそうです。だからこそ、人権教育は、家庭でも学校でも日常的に取り組んでいかなければなりません。人権旬間は終わりますが、これからも引き続き続き一人一人の子どもの人権を大切に取り組んでいきます。

1・2年生　秋の遠足へ

11月24日(火)、本校1・2年生が生活科の学習を兼ねて金魚と鯉の郷公園まで出かけました。朝はかなり冷え込んでいましたが、到着する頃には日差しも強くなり、お弁当以降は暑いく感じるほどよい天気となりました。

学校とはちがう遊具で思い切り楽しんだ後は、それぞれの課題について勉強もがんばりました。2年生は1年生をやさしくリードする姿も見られ、双方にとって貴重な校外学習となったようです。教室では学ぶことのできない体験的学習の大切さと同時に、コロナ禍で減ってしまっている学校行事の意義を感じたところです。

コロナ感染拡大、第三波か

沈静化どころか拡大しているコロナウイルス感染症。毎日全国での感染者数の増加報告にため息が出るのは私だけではないはず。気温が下がり、湿度も落ちてくるとやはり増えてくるのですね。インフルエンザの流行の話はまだ聞きませんが、コロナ感染症の全国的な広がりを見ると、もう一度基本に戻って、3密を避ける、手洗い、うがい、マスク着用に意識をむけるしかありません。学校では、毎日、家庭で検温をしてから登校する健康チェックカードの提出をはじめ、マスク着用への指導、下校後の消毒など、継続した取組を行っています。今年も残り約一ヶ月となり、なんとか平常通りの授業を行うことができています。ただ、またいつ何時臨時休校になってしまうのか、常に危機感をもって授業を行っているところです。ご家庭でも検温、マスク、ハンカチの携帯等へのご協力ご支援を引き続きお願いします。

あいさつ、返事に力を入れています

かねてから、校内外でのあいさつについて指導をしていますが、する子どもとしない子どもの差はとても大きいものがあります。朝、登校指導で校門や交差点に立っていると、長洲中の生徒さんのあいさつのよさに気づかされます。寒さが増してくると、気持ち的にも沈むのか朝のあいさつはかなり低調です。そんな時は私もわざと大きな声であいさつをするのですが、それでも元気のないあいさつを返すか、中には返さない子どもも・・・。あいさつは、人と人とが交わすコミュニケーションの入り口であり、それしだいで距離感も変わってきます。それがわかっているのに、ついついつれない、元気のないあいさつに終わってしまえば、やはりそれから先が進みませんし、広がりません。

私は、今、時々学級に入って授業をすることがあるのですが、授業の合間にあいさつ同様、返事をすることについて指導をしています。聞いているのかいないのか、理解できたのか、そうでないのか、やはり返事をすることで相手も話しぶりが変わってきます。返事をしない子どもには、「返事には、相手を大切にしていますよ、ちゃんとあなたと向き合っていますよ」という意味があるからね、と子ども達に話しています。

ご家庭ではどうでしょうか。まずは、大人が進んで手本を見せたいものです。私たち学校職員も手本になるように意識したいと思いますし、気持ちのよいあいさつができるような人でありたいと思います。